大和屋の歴史展 第弐弾

材木屋の昔と今

180年の回顧

今年2月で創業184年を迎えた大和屋の歴史展が3回にわたってくまがや館で開催されている。第壱弾の「雛まつりにちなんで～江戸時代」には、会期中、県内外から千名近い参観者で賑わい、主催者も驚いたという。続く第弐弾は4月11日から同23日まで「材木屋の昔と今」をテーマに開催されるが、展示を前にその見どころを探ってみた。

大正5年当時の製材工場（現在の17号交差点塗屋付近）熊谷女子高正門あたりから撮影

第弐弾の背景にあるものは、地域に深く関わりあい時代を生き抜いた材木店のありようである。近在から「大小材木店」として親しまれた大和屋小源治の「諸色日記帳」には文政7年から32年間にわたる公私ともども出来事が記録されている。29才で分家し、穀屋を開業。6年後には忍藩より名字帯刀を許され御用商人に。災害時の商いも失敗談を含めて詳しく記されている。初代の先見性と義侠心に富んだ人柄が行間からにじむ。江戸の大火災の時は熊谷の材木は飛ぶように売れたこと、しかし調子に乗りすぎてはならないと戒め、地域の災禍には力を合わせて事に当たらなければならないとある。

二代目小源治の時代に、明治維新を迎えたが、忍城の引渡しを前に修理や、廓下の張替えなどを大和屋が行なっている。室町時代に成田氏が築城し、秀吉の水攻めにも耐え、江戸時代に徳川松平家十万石として栄華を誇った城の最期を見取った気持ちはいかばかりであったろう。

廃藩置県後、明治6年から3年余りの短期間ではあったが、熊谷県となり、県庁は熊谷寺境内に置かれていた。熊谷の旦那衆たちは新政府にも顔が利く実力者が多かったのだ。

熊谷は秩父から切り出した材木の集散地として栄え川沿い周辺には材木商が建ち並んでいた。

明治16年には鉄道が上野熊谷間を走り、明治34年には秩父鉄道・熊谷寄居間が営業開始。鉄道開通後も大正の頃までは川を下る筏流しは荒川の風物詩だった。木材は町を潤し建設の槌音は鳴り響いていた。大正12年の関東大震災や、昭和22年のキャサリン台風の利根川災害復興に貢献するなど、大和屋をはじめとする熊谷の材木商は力を振るったのである。

「森の家」は住まいの究極のテーマ

そして180年の歳月が流れ、21世紀の今、製材業は大きな転換期を迎えている。

大和屋も木材・建材から、不動産を含め、住宅建築、マンション、駐車場経営と住空間の創造をめざす企業へと成長した。自然に優しい温かみのある木をふんだんに使った住まいへのこだわり、題して「森の家」。木をふんだんに使った住いは、そのまま森の中の暮らしにつながるというのがコンセプトだ。

↑市内・医院建築の上棟式の模様（大正時代）

現在「大和屋」が手がける「森の家」　→

材木となった木はさらに生き続け、やさしく呼吸し、包み込み人を癒す。「森の家」は住まいの究極のテーマだ。森林は地球を救う。木とともに存在した大和屋の永遠のテーマでもある。

今は幻・新川河岸 筏舟ものがたり

今、知る人ぞ知る「幻の河岸・新川」。新久下橋から500m下流の河川敷、元屋敷の森が点在する東西1.6キロ南北545mの小さな無人の村。半世紀前まで500人ちかい人々が暮らし、江戸・明治の頃は舟運と養蚕で栄えた村である。今尚、先祖伝来の墓地や江戸時代の鳥居、石仏が昔の栄華を物語る。ここは荒川舟運の起点であり秩父山中から切り出される木材の集散地であった。川原には多くの筏職人が筏舟を組み直すため逗留した。筏職人が泊まる民宿もあった。筏問屋や回船問屋が軒を並べ繁盛していた。

普通の荷物は浅草から千住、川口、大宮、桶川を経て小八林、玉作、新川河岸まで川路100キロを22箇所の大小の河岸で荷の積み下ろしをしながら、約２週間で行くのんびりしたものだった。江戸からは塩や油など日用品を運び、新川からは米や農産物や肥料を運んだ。特に材木の商いは大きなものだった。乗客用は早船といって浅草・久下を一昼夜で行き来した。

船頭たちは「アアー～おせや、おせおせ二丁橋でおせや、おせば千住も近くなる」と歌いながら舟を運ばせた。荷物のつく日には近在から大八車が列をなし荷揚げが終わると遠くは本庄、秩父方面まで運んだという。

大和屋の初代小源治の「諸色日記帳」には、たびたび新川河岸の名前が出てくる。通常は新川・丸岡清八・喜平といった問屋に米や板を売り渡すなどという記述がある。江戸の大火が相続いた時は、人を頼まず自分自身が筏を仕立てて翌日には千住に到着。途中、大宮あたりで対岸の火事を目にしたという。川岸で荷揚げをし月明かりで板をあらため、明け方４時には仲買方に持って行ったとある。災害時の売買は売れるからと長々してはならないという戒めも書き込まれている。上の写真は秩父山中で木材を切り出し、筏流し直前の様子である。大和屋に残る貴重な一枚である。　（H）